



座学からフィールドへ： 国際学部基礎ゼミナールの取り組みから

国際学部 若林 一平



現在、国際学部教授・湘南総合研究所所長。日本国際文化学会常任理事。
NPO 法人ユーラシアンクラブ理事。

担当科目はコンピュータ演習・現代社会論（情報）ほか。ゼミテーマは「戦争と平和のメディア学」で大日本帝国時代の遺跡の調査・検証を行っている。2009年9月、ゼミ生とロシア連邦サハリン（旧樺太）を訪問、残留韓国人社会との交流を実施した。（わかばやし いっぺい）

2008年秋学期、国際学部の1年生全員を対象として開講された基礎ゼミナールを紹介して「座学からフィールドへ」の現場を見ていただく。筆者が担当したのは新たに入学してきた国際観光学科の1年生のクラスである。

各大学とも「座学からフィールドへ」を合言葉としてまずは学生たちをフィールドへと誘う。学生たちはそこから問題を発掘して考え、立案し、発表し、討議することにより現代の「読み書き」を学ぶ。ただしフィールドは地域から国内各地さらには海外へと展開する。

1 テキストは『知的作法（スタディ・スキル）の道工具箱』

このテキストの発行は2008年9月1日、編集は赤坂雅裕・阿野幸一・井上由佳・海津ゆりえ・山口一美の5名からなる「基礎ゼミナールテキスト作成チーム」である。A4版で36ページ、持ち歩きにも便利なヴォリュームである。

テキストは3つのユニットからなる。ユニ

ットA「リサーチ&プレゼンテーション」は必修とし、ユニットB「ディスカッション」とユニットC「ディベート」は選択である。ユニットA&BあるいはユニットA&Cの組み合わせにより調査研究と発信スキルを身につけようとするものである。

2 テーマ探しから現地調査へ

湘南校舎の近くには文化資源・自然資源が豊富である。文化資源としては、徒歩15分ほどに大岡越前ゆかりの浄見寺があり、自然資源としては、同じく徒歩15分に里山公園があり、公園と大学のちょうど中間に「文教大学遊歩道」がある。この遊歩道は1985年の湘南校舎開設以来保存林の中に設置されている。この夏から宮原国際学部長のもとで「カレッジ・ビレッジ構想」の森作りプロジェクトの

もとの整備が進んでいる。

毎年、新入生のこのクラスの最初の授業では、大岡越前の浄見寺か文教大学遊歩道経由で里山公園に全員で行くことにしている。大学と地域との緊密な関係性を実際に現場の空気を吸いながら知るためである。現場での茅ヶ崎入門のあと、次回の授業からテーマ探しを始める。

20名クラスが4グループに分かれて集団討議を進めるのだが、茅ヶ崎市観光協会から提供していただいた茅ヶ崎の地図「ちかさきガイドマップ」(13000分の1)とタウンガイド「ようこそ茅ヶ崎へ」を配布して大まかな予備知識を吸収してから、テーマ探しのためのブレインストーミングを行う。テーマ探しにつけた条件は地域からの課題の発掘である。テーマが固まったら、テーマに即した現地調査を行う。今回のとりくみは次の4つである。

●新しいカフェの創造：魅力的なカフェとは何か。手がかりとして里山公園の北側に位置する「ギャラリー 木の実」を訪ねてオーナー夫婦にインタビューした。グループ作業としては、コンセプトづくり、新しいメニューづくり、インテリア、コーヒー豆、経営、などの研究を分担して進めた。

●MOKICHI3号店の開店：「湘南ビール」で有名な熊澤酒造は現在香川駅と茅ヶ崎駅の近くに2店のビヤレストラン MOKICHIを出している。これまでとは違う顧客層を対象として第3号店の出店計画に取り組む。1年ゆえビールを飲めないでグループで第1号店でランチをいただいて現地調査を実施した。コンセプト、メニュー開発、立地、インテリア等の研究へ進む。

●さかなとまち：茅ヶ崎名物の「シラス」に注目した。グループでシラス料理を食べに行き、調査は漁業・各地の魚料理・新メニューの提案へと進めた。

●健康な生活とは：茅ヶ崎保健所に調査に行き地域の健康関連データを収集した。食生活、生活習慣、運動、病気の予防、などを分担により調査を進めた。

3 プレゼンテーション＝発表準備

パワーポイントはスライドの見た目に幻惑されて中身の無いことが多い。そこでこのクラスでは模造紙1枚に企画案を整理して、写真やイラストも駆使して発表資料を作成した。この方が手作業をとめないワイワイしながらグループの作業も活性化するのである。

発表準備でもう一つのポイントは文献調査である。「調査なくして発言無し」を合い言葉に必ず関連文献の参照を義務づけて別途概要とコメントの提出を求めている。書名の例をあげると、『顧客創造の書店経営』、『コーヒー文化の集大成』、『これが繁盛立地だ』、等々である。要は「思いこみ」を超えた主張の客観化を要求しているのである。

4 パネルディスカッションそして課題

全体発表会は、1回目がブレインストーミングの結果発表、2回目が現地調査の結果発表、3回目が最終回のパネルディスカッションである。

各グループ単位で、司会者1名とパネリスト4名という陣容で発表とパネルディスカッションを実施した。パネリストであるがゆえに建前としては各界の権威が集まってあるべき方向性を探るといって議論は進む。フロアからややちぐはぐな発言が飛び出すことでかえって会場は和む。過干渉はいけない。

フィールドを楽しむことは大切だが、さらにフィールドワークの技法を学びもう一つ上の「知的作法(スタディ・スキル)」へと高めていくことが次の課題である。

(2009年12月18日記)



パネルディスカッション風景